

2022年度

2月10日

入学試験

国 語

(50分)

注 意

- 1 試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。
- 2 問題は□一から□三まで、14ページにわたって印刷してあります。
- 3 解答の下書きが必要なときは、この問題用紙の余白を利用しなさい。
- 4 解答用紙には、受験番号と氏名を書きなさい。
- 5 解答はすべて解答用紙に書き、解答用紙を提出しなさい。
- 6 句読点、記号は1字として数えなさい。
- 7 本文中には、問題作成のために省略や表現を変えたところがあります。

かえつ有明高等学校

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

うまくいっている時、人はなかなか学ばないものである。人は惰性<sup>だせい</sup>に流されやすい怠惰<sup>たいだ</sup>な生き物で、自分を変えるのは苦手である。本当にひどい目にあった時、大きな犠牲<sup>ぎせい</sup>を払<sup>はら</sup>って、人はじめて変わることができる。僕<sup>ぼく</sup>自身<sup>じしん</sup>を振り返<sup>かえ</sup>ってみても、ひどい目にあつて、人生がいったん弾<sup>はじ</sup>けて、どん底になった時に、はじめて変わることができた。

都市も同じだと思う。うまくいっている時、うまくいっていないと思<sup>こ</sup>い込<sup>こ</sup>んでいる時、都市はなかなか変わることができない。その意味では、都市の方が人間よりもっと変わりにくいものかもしれない。都市は A 図<sup>ず</sup>体が大きいし、ちよつと変えるだけで、巨額<sup>きやうがく</sup>な金がかかる。法律や所有関係などでも、がちがちに縛<sup>しば</sup>られているから、都市が変わるといのは想像以上に大変なことである。

しかし、<sup>①</sup>長い歴史上には、都市も変わらざるをえないことが何回かあつた。いつかという、人間が変わる時と同じで、都市がひどい目にあつた時である。

たとえばシカゴでは一八七一年の大火で、市街地にある煉瓦<sup>れんが</sup>と木の建築の大半が燃えてしまった。そのような大変な犠牲を払<sup>はら</sup>った後、コンクリートと鉄の街を作ろうということになり、そこから「シカゴ派」という鉄骨造りを中心とした新しい建築のムーブメントが起こつて、二〇世紀アメリカの都市の原型が

できあがつた。

「ひどい目」の中でも、とりわけ都市に与<sup>あた</sup>えた影響<sup>えいきやう</sup>が大きかつたのが、一四世紀のペストの流行である。ヨーロッパでは、ペストが中世の時代に終止符<sup>しゆうしふ</sup>を打ち、その後ルネサンスが到来<sup>とうらい</sup>した。

ルネサンスはよく「文化の復興」と訳されるが、その作用は都市においても同様であつた。中世の都市は一言でいえばゴチャゴチャとしていた。ストリートは狭<sup>せま</sup>く、不衛生で、ゆえにペストの B オンシヨウとなつた。ルネサンスの都市計画は、整然としたストリートを指向し——実際にはほとんど実現しなかつたが——都市の単位となる建築も、整然としたものが目指された。ペストから人々を救えなかつたキリスト教会に対する信頼<sup>しんらい</sup>低下も、ここで一役買った。神に頼<sup>たよ</sup>つてばかりいないで、自分の頭で考えよう、ということになり、数学、科学が重要視され、数学によつて形態を整理し、寸法を計算されたルネサンスの建築と都市が歴史に登場したわけである。

この、ペストからルネサンスへとという流れの行き着いた果てが、二〇世紀であつたと僕は考える。整然として閉じたハコを、どんどん建てて、どんどん大きくするという流れだ。超高層<sup>ちやうこうそう</sup>が乱立する現代の巨大都市をイメージすれば、流れの最終形を僕は容易に想像できるだろう。

ここで最も重視された基準は何かというと「効率性」であつた。閉じたハコ、すなわち人工的な環境<sup>かたききやう</sup>に人を閉じ込めること、

閉じ込められることが「効率的」であるとされ、それが「幸福」であるとも定義された。大都市の工場やオフィスビルはハコの典型であり、中でも超高層ビルは、それらのチャンピオンだった。人々は、電車やバスというハコに詰め込まれて、自然を破壊して建てた郊外のハコに帰る。その行動様式が、ポストペスト時代の生活のデフォルトになった。僕はこれを「オオバコモデル」と呼ぶ。実際のところ、「オオバコモデル」は、今や少しも効率的ではなく、ストレスの原因でしかない。

オオバコモデルに至るまでの人類史には、先述したシカゴ大火以前から、リスボン大地震（一七五五年）による都市デザインの転換など、歴史的な事件が起こっていたが、振り返れば、それらはすべて <sup>②</sup> ペスト禍から超高層ビルへとという大きな流れの中での、小さなエピソードに見えてくる。

そして二〇二〇年の新型コロナウイルスの世界的な感染拡大である。ポストペスト以来の流れによって、世界中を埋め尽くした巨大な都市の人工空間が、いかに脆く、いかに生物としての人間の生理に反した不自然なものであるか。ここに来て、コロナウイルスが、その問いを世界につきつけたように僕は感じる。コロナウイルスが来なければ、僕たちはポストペストの慣性のまま、都市に閉じ込められ、効率性の神話を信じ続けていたかもしれない。方向転換もできぬまま、不自由になってしまった自分の姿に気が付くことなく、さらにオオバコを積み重ね続けていたかもしれない。

とりわけ <sup>③</sup> 日本は、このオオバコシステムの優等生であった。

第二次世界大戦後の日本は、オオバコを作ること、欧米にキヤッチアップしようとして走り続けた。その熱情を支えていたのは、それ以前の日本の都市が、オオバコの対極だったからである。たとえば江戸のまちでは、通りは狭く、ヒューマンスケールで、木造の家は風通しがよく、公私の境はあいまいだった。これはオオバコとは、実に タイシヨウ的な姿である。江戸のまちは、そのヒューマンスケールを保ちながら、他のいかなる国よりも衛生的であり、環境資源のリサイクルを含めて、効率性の高い都市システムを構築していた。だからこそ、世界のオオバコ化の流れに巻き込まれることなく、日本独自のシステムとして、第二次大戦時までサバイバルできていたのである。

しかし敗戦によって、日本は江戸システムとは訣別し、オオバコシステムに追いつこうと、政治、経済が一丸となって 疾走を開始した。その中心となった担い手こそが、建設産業であった。建設産業は政治を支え、政治は逆に建設産業を支えることで、日本は戦後に効率性至上主義へとなだれを打つ。

オオバコシステムは、オフィス空間のみならず、都市のすべての空間のモデルとなった。教育も同じく、生徒を均質なオオバコに詰め込んで、「平等」に授業を供し、それとは矛盾する競争に駆り立てることが効率的とされた。そこで育った子どもたちは、そのまま企業というオオバコに詰め込まれ、同じように激しく競争させられて、ある年齢に達したり、「効率」が落

ちてきたりすると、オオバコから放り出された。そのシステムが人間に強い大きなストレスに対しても、効率性の名のもとに、目がつぶられ続けた。

日本国民による「疾走」のユニークな点は、このオオバコシステムが曲がり角に来てでも依然としてみんなが走り続けたことである。二一世紀は、経済の低成長、その前提となる高齢化社会の到来で、オオバコの必要性はそもそも薄れていた。実際、ITテクノロジーの発達によって、オオバコに閉じ込められなくとも、僕たちはすでに十分効率的に、しかも、はるかに気楽で自由に仕事をするのが可能となつている。にもかかわらず、日本人は風通しの悪いオオバコにこだわり続けた。その背景には、<sup>④</sup>建設産業の「サムライ化」があると僕はにらんでいる。

江戸時代以前の戦国時代は、戦後の日本が建設産業を必要としていたように、「武士（おサムライさん）」という武装集団を社会が必要としていた。それら武士の集団は、江戸時代に世の中が静かになつた後には、もはや必要がなくなつたが、それでも徳川政府は彼らを社会の上位の階層として温存し、奉つた。温情社会ならでの、そして、慣性力がやたらに強い日本ならでの、やさしく生温い決断である。

それと同じことが、昭和から平成にかけて起こつた。

都市にオオバコを早急に整備しなければならなかつた昭和の時代には、建設産業が国を支え、社会全体が建設産業を必要とした。戦国時代にマッチョな武士集団が必要とされたように、

コンクリートと鉄で、大きくて密閉されたものを作るだけのマッチョ集団を、社会システムが必要としたのである。

しかし、現在はどうであろうか。平成以降、昭和とはうって変わった低成長、少子化と高齢化が、社会の大きな問題となっている。そんな時代にマッチョな建設産業は、江戸期の武士集団と同じく、もはや無用の長物と化した。それでも幕府Ⅱ政府は、建設産業の集団主義、統制主義が、選挙の強力な集票装置になりえることを知っているから、建設産業を可能な限り保護し、<sup>⑤</sup>優遇し続けた。

これはきわめて日本的な現象でもあつた。オオバコ化は近代における世界的な歴史現象ではあつたが、金融やITのような「軽い」産業の方が儲かると気付いた諸国は、いち早くそこから卒業している。しかし、日本は前世紀的な建設産業を担つていた社会集団Ⅱ武士を温存して、オオバコ化からの卒業が遅れた。だから日本の都市ははまだ、固く、重く、閉じたままなのである。

コロナの後の都市のテーマは「衛生」ではなく、「」である。人がハコに閉じ込められて、同じ時間に通勤、通学させられるのではなく、好きな時に、好きな場所で仕事をし、眠り、移動をする。現代のテクノロジーは、すでにその自由を僕らに与えている。しかし、都市が、そして建築が、その邪魔をしている。

僕も含めて建築設計者もまた、長い間、武士であつた。時代

から取り残され、必要とされなくなった社会集団は、新しい現実を理解できないままに、自分たちの美学を日本刀のように磨き上げ、内側の倫理観を人に押し付けて、ふんぞり返る。倫理というのは、しばしばそのような目的で使われる。人のお金で、建築を作らせてもらっているくせに、現実の社会から仕事をいただいているくせに、その現実を見下し、自分たちの美学、倫理の方が上等であると勘違いした。

そのことに気付くようになってから、僕は自分で小さな商売を始めることにした。若い仲間とシェアハウスを作り、その屋上に野菜を植えた。木のトレーラーハウスをデザインし、そのトレーラーハウスで実際に移動式の飲食店を経営してみた。小さな工場や田舎の職人と直接つながって、一緒に新しい材料に挑戦し、セルフメイド建築の可能性を追究した。廃品の収集、再生を商売とする人たちと知り合い、廃品を主役にした建築も作り始めた。オオバコの外側にある風通しのいい場所、そこで生きる自由な人たちと仕事をし、暮らすことで、それがいかに自由であるかを知った。

コロナ後の未知の時代を、どう生きるか、その新しい地面の上にとどめるべきか。⑥ 自分自身の小さな体験が、何かを教えてくれる。そのための具体的なヒントを、清野由美さんともう一度考え、探した結果が、この本になった。ペストから約七百年。僕たちは歴史の大きな折り返し点に立っている。

(隈研吾／清野由美『変われ！ 東京

自由で、ゆるくて、閉じない都市』より)

\*デフォルト：物事の標準の状態。

\*キヤッチアップ：優位な者や先行する者を追いかけて、そこに並ぼうと努力すること。

問一 ……部A～Dのカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

問二 ① 長い歴史上には、都市も変わらざるをえないことが何回かあった。とありますが、筆者は、その変化のきっかけの中で最も大きなものは何だと述べていますか。最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ペスト流行
- イ リスボン大地震
- ウ シカゴ大火
- エ 新型コロナウイルス感染拡大

問三 ② ペスト禍から超高層ビルへという大きな流れ。とありますが、この「流れ」とは都市の建築におけるどのような変化のことを指していますか。百字以内で説明しなさい。

問四 ③ 日本は、このオオバコシステムの優等生であったと

ありますが、この表現には筆者のどのような意図が込められていますか。最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 環境資源のリサイクルを含む江戸システムを構築できていたことの誇示

イ 江戸時代の街づくりにおける公私の境目のあいまいさに対する批判

ウ 敗戦後における政治と建設産業との結びつきの強さに対する皮肉

エ 世界でも類を見ない速さで戦後の復興を遂げたことへの賛辞

問五 ④ 建設産業の「サムライ化」とありますが、「サムライ

化」とはどのような意味ですか。「〜こと」につながる形で、文中から九字以内で抜き出さない。

問六 ⑤ 日本的な現象 とありますが、「日本的な現象」の説

明として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 現代の社会で本当に必要な集団を冷遇してしまうことで、  
不要な前近代的な集団が幅をきかせてしまうこと。

イ 現代の社会においてもはや不要であるにも関わらず、前  
世紀的な集団に特別な配慮をし続けていること。

ウ 過去に活躍した集団をいつまでも重要視するあまり、現  
代の社会の自浄作用が失われてしまうということ。

エ 過去に社会を支えた集団を重要なポストに登用し続ける  
ことで、現代の社会での可能性を見出そうとすること。

問七  に当てはまる語を文中から二字で抜き出さない。  
い。

問八 ⑥ 自分自身の小さな体験が、何かを教えてくれる とあ

りますが、「何か」とはどのようなことを指すと考えられますか。最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えな  
さい。

ア グローバル化による効率主義から脱却することが、都市  
の在り方を再考するヒントとなるということ。

イ テクノロジーの進化を日常に取り入れることが、新しい  
都市を作るデフォルトとなるということ。

ウ 建築設計者のおごりを捨て去ることが、東京の都市問題  
を解決するスタートとなるということ。

エ 身近な暮らしや日々の仕事を見直していくことが、都市  
の未来を考えるきっかけとなるということ。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

父親がいなくなつてから一カ月半後、母親も失踪してしまつた。吉瀬走は、数日間母親がつくり残していったクリームシチューを食べ、学校に通い続けていた。次の文章はその後の場面である。

一週間、あてずっぽうに歩きまわつたけれど、母親の行方はわからなかつた。そもそも、捜すあてなどにもなかつた。親戚とのつきあいもなく、親しくしていた母の友人は顔くらいはわかる、という程度で、名前も連絡先も知らなかつた。

追い打ちをかけるように、高校から授業料滞納の手紙が届いた。

八月から十一月までの学費納入金額、二七万六四〇〇円。八月末までの支払いが滞つていた。

二七万六四〇〇円……。

どこをどうひっくりかえしても、そんな大金がでてくるとは思えない。

『経済的理由で退学します』

一行、レポート用紙に書いて、提出した退学届は一発で受理された。

もしかしたら引き留めてもらえるのではないかと淡い期待もしていたが、さすががしいくらしいはつきりしていた。

高校は義務教育ではないのだということを、はじめて実感

した。

心残りだったのは、二週間後には高校駅伝の予選会がはじまることだった。とくに強いチームではない。都の予選会を通過したことだつて、創部以来、過去に一度あつたきりで、もう十数年前の昔の話だ。それでも去年から部員全体のタイムがじわりと伸びはじめ、オレ自身も記録会では安定して五〇〇〇メートル十五分台前半をだせるようになっていた。夏前の記録会では十五分〇三秒まであがつた。他の部員も十五分台から十六分台前半をだして、夢ではなく関東大会をねえるところまでできていた。

① 退学することは、顧問の豆木先生にだけ話をして、部のみんなにはなにもいわなかつた。

先生にもみんなには黙つていて欲しいと頼んだ。

なにもいわないほうがいい。

余計な荷物は背負わないほうがいい。

陸上はセンサイなスポーツだ。わずかな心の揺れが、おどろくほどダイレクトに走りに影響する。

みんなの足を引っ張つて辞めることはしたくなかつた。

……つて、本当はそんなんじゃない。そんなことは、かつこつつけているだけだとわかつていた。だけど、それくらいしなかつたら、つぶれてしまひそうだった。

哀れまれたり、同情されたり、これ以上、自分を惨めにしなくなかつた。

「なんとかならないのか」

豆木先生はそういつて、

「なんとかなるものなら、なんとかかしてるよな」と、ことばを  
A。それから、夜間高校のパンフをカバンから取り出した。  
「勉強も陸上も、その気になればいつだって、どこでだってで  
きるから」

先生のいつていることはうそじゃない。まちがってない。本  
気でそう思っているんだろうなと思う。

だけど……。

オレはそれを受け取って、だまって笑った。

うれしかったわけでも、感謝していただのでもない。ただ、お  
かしくて笑えた。

まっとうすぎる。

② 正論すぎることは、きれいだけどそれだけだ。

帰り道、コンビニの前にあるゴミ箱にパンフを突っこんだ。

仕事を見つけよう。

働いて、金をかせいで……。

でも、どうやって？

家に帰って、学ランを脱ぎ捨てるところと大の字になった。  
オレは、なに者なんだろう。

どこにも、だれにも属してない。属するものが、なにもない。  
どこの、だれなんだ、オレは。

アホみたいにそんなことを考えていた。考えなければいけな

いことも、やらなければいけないことも山ほどあるはずなのに、

心もからだも動かない。動こうとしない。ただじつと二階の住

人の足音や流しの水の音、戸を閉める音に耳をすましていた。

このすぐ真上で、薄い天井のむこうで、日常を繰り返してい  
る人がいるということが、  
③ やけに奇妙なことに思えた。

四日目に、ふらりと外へでた。

なぜだろうと思つたのか、あまり覚えていない。ただ、外に  
でたとたん、太陽がやけにまぶしかった。風が冷たかった。ど  
こからカレーのにおいがして、空腹だったことに気がついた。  
オレは、腹が減っていることにも気がつかなかつたのか。そ  
う思うと、ぞくりとした。

ぎゅるつと腹が鳴る。

このままじゃだめだ。そう思つたとたん、無性に走りたく  
なつた。空腹で、しかも制服のままだけど、足下を見るとジヨ  
グ用のシューズに足を突っこんでいた。

すつとからだの前にてた。

タツタツタツタツ

地面を一定のリズムで足音が刻む。

排気ガスのむつとくる臭いが懐かしかった。こんなに空気の  
悪い場所なのに、心地いいと感じる。足の裏でとらえるアス  
ファルトの堅さも、ほおぼおと耳元でうなる風の音も、じわり  
とにじむ汗も、全部が、いい。

④ ただ走る。

びりびりとしたなにかが肌を包む。

心臓の D コドウを感じる。

どくどくどく

どくどくどく

苦しいのに、立ちどまりたいとは思わない。

環七沿いを十五キロほど走って、アパートの前まで帰ってき

たときは、息があがっていた。十五キロや二十キロのジョグで、

これだけ息があがることはない。突っこんで、あげすぎていた

のだと気がついたときは、もう立っていられなかった。

ポケットから鍵をだし、ドアを開ければいいだけなのに、そ

れもできずにへたりこむ。

息が荒い。汗が背中を伝う。足を投げだし、ドアに背中をあ

ずけてアゴをあげた。

暗がりの中で、自分の息づかいだけが聞こえる。

そのとき、外階段のむこうからぬっと黒い影が現れた。

「よっ」

聞き覚えのある声だ。

ずずと足を引き寄せ、ひざを立てて目を細めた。

「あ、」

前平さんだった。

「おせーよ」といいながら、冷め切った缶コーヒーを投げてよ

こした。

「メールの返信くらいしろ」

そういつて、「おまえ、走ってきたんだ」とオレを見て笑った。

前平さんは五つ上の陸上部のOBだ。卒業してからも学校に

ふらりとやってきては、練習に参加していた。OBの中にはと

きどき部活に顔をだす先輩もいたけれど、前平さんのようにガ

チで練習に参加する先輩は少ない。というより、この人くらい

だった。

かといって特別親しいわけでもなかった。

だから、戸惑った。

なんでここにいるのかと、おどろいたというより、不思議

だった。

「ちよつとつきあえ」

⑤ 前平さんはここにきた理由もなにもいわず、ただつきあえと

ひと言いつてオレの腕を引いた。

「あの」

アパートの門をでるところで声をだすと、「からだ冷えたか

ら」とだけいつて、オレの腕を放してずんずん先を歩いていく。

からだ冷えたつて……、前平さんのことばの意味はまるで

わからなかった。それでも無視をするわけにもいかず、ついて

いった。

前平さんは環七に出る手前の角にある『ゆ』と書いてあるの

れんをくぐった。(中略)

銭湯をでると今度は「腹減ったな」といつて前平さんは歩き

でした。

オレはさつきまでは気にならなかつた数日間着たままのシャツや下着の臭いを気にしながら、口笛を吹いて歩いていく前平さんのあとをついていった。

気がついたときは、ファミレスにいた。

「肉食え、肉」

そういつて、前平さんはステーキふたつとデミグラスハンバーグふたつとほうれん草のソテーふたつとビールを注文した。それから食べ終わるまで、この夏にやっていた世界陸上の話や、新しい体幹トレーニングの方法がどうのと、とりとめのない話をしていった。

いったい、この人はなにをしにきたんだろう……。

そう思いながら、相づちを打ち、肉を食った。途中で前平さんはビールをもう一杯追加して、「おまえも飲む？」と真顔でいった。

ぶんとかぶりを振ると、「ふうん」とわずかに唇をとがらせた。

最後、一切れ残ったステーキを口に入れて顔をあげると、前平さんと目が合った。

「腹いっぱいになった？」

大きくうなずいて、「はい」と肉を噛みながらいうと、前平さんは「よし」と笑い、二杯目のビールを流しこんでオレを見た。

「おまえ、車夫やらないか？」

「……………シャフ？」

シャフということばを交換できずにいると、前平さんはナプキンを一枚抜いて、そこに『車夫』と書いた。

「人力車のひき手のことだ」

「人力車って、あの、時代劇とかにでてくるあれですか？」

「ん。それ」

……まったくイメージできなかった。

そもそもそんな昔の乗り物がいまでも使われているのか？ なののために？ だれが乗るんだ？

よほど混乱した顔をしていたのか、前平さんは「大丈夫か？」と首をかしげた。

「大丈夫です。大丈夫ですけどそれって」

「仕事だよ」

「仕事」

「そうだ。週六日。日給七千円に歩合。見習いのうちは歩合がつかないから少しきついけどな、でもまあ客を乗せられるようになれば、そこそこの手取りになる」

仕事……。

ゴクリとぬるくなった水を飲んだ。

「いまなら寮もひと部屋あいてるぞ。家賃は電気水道ガス代こみで月二万。台所と風呂と便所は共同。風呂は小さいけどな、近所に銭湯がある。『力車屋』まで徒歩十五分っていうのも便利だ。あ、『力車屋』ってのは、屋号だ」

仕事。

高校中退で、しかも親も行方不明という条件のオレを雇やとってくれるところがあるだろうかと不安だった。そう簡単に仕事が見つかるとは思っていなかった。それでも、日雇いの仕事はしたくなかった。アルバイトでもなんでも、自分の C が欲しかった。

でも、なんで前平さんが？

ああ、そうか、豆木先生だ。先生に頼たのまれて……。

「別に豆ちゃんに頼まれたわけじゃねえよ」

「えっ」

「おまえ、いまそーいうこと考えただろ。ま、おまえが学校辞めたこととかは聞いたけどな。そりゃそうだろ」

「……」

「おまえ、みんなに挨拶あいさつひとつしないで辞めたんだって？ 豆ちゃん、あいつらにかなり責められたらしいぞ。なんでいってくれなかったんだ、とめなかったんだってさあ。そんなこといわれても豆ちゃんだって困るよな」

前平さんはげらげら笑って、それからまじめな顔をしてオレを見た。

「オレは、だれかに頼まれたわけじゃねえよ。だいたいだれでもないってわけにはいかないしな、うちは」

「じゃあ、なんでオレを」

「ひとり辞めちゃったんだよ、で、ひとり補充ほじゅうしたいんだけど、

なかなかびたつとくるのがいなくてさ。おまえは、そーいう意味で条件に合ってるんだ」

「条件、ですか？」

「そっ。おまえ、走るの好きだろ。それに」

「それに」

ごくりと唾を飲んだ。

「顔だよ」

「へっ？」

思ってもみない単語に、一瞬いっしゆん耳を疑った。

「顔。『力車屋』は顔のいいやつしか採用しない」

ホストかよっ、思わずそっくみそうになった。

大丈夫なんだろうか。

前平さんは食後のデザートにキャラメルスイートパンケーキを注文して、もう一枚ナプキンを抜いて、地図を書いた。

「あした八時にこい」

そういって、ナプキンといっしょに千円札を二枚、交通費だといっってオレの前に置いた。

(いとうみく『車夫』より)

問一 ……部A～Dのカタカナを漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

問二 ① 退学すること とありますが、「吉瀬」はこのことを

どのように思っていますか。最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 母を捜すあてがなくなってしまう途方に暮れているものの、関東大会出場を狙える、学校の部活の仲間には絶対に迷惑をかけられないと思っている。

イ 母の行方がわからないことを友人には知られたくないのと、部活の友人達には心配をかけたくないからこそ、経済的な理由にせざるをえないと思っている。

ウ 経済的な理由で学校を辞めなくてはいけなくなってしまうが、慰留をしない学校の対応から、自分の力で生きていくしかないことを悟っている。

エ 母親の居場所がわからなくなり、学費の納入も自分ではできないので仕方がないとは思っているが、高校駅伝に出場できないことに未練を感じている。

問三 A に当てはまる表現として、最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 尽くした
- イ 濁した
- ウ 挟んだ
- エ 紡いだ

問四 ② 正論すぎることは、きれいだけどそれだけだ とありますが、ここから「吉瀬」のどのような心情がわかりますか。最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ありがたいとは思っているものの、今の気持ちには寄り添ってもらえていないと感じる心情。

イ 間違っているとは思わないが、陸上のことを考える気には到底なれない心情。

ウ 道理にはかなっているが、自分の現状からすると見当違いだという心情。

エ 現状からすると、正しいことは自分にとってはとても残酷であると思う心情。

問五 ③ やけに奇妙なことに思えた とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 当たり前のようにあった生活が失われたが、近くには今までと変わらぬ生活があったから。

イ 以前の何気ない日常を思い返してしまい、そのありがたみをかみしめているから。

ウ なにも考えることができなくなり、今の状況は本当に現実なのかと錯覚しているから。

エ 二階の部屋の生活を思い浮かべて、必死に悲しみをこらえようとしているから。

問六 ④ ただ走る とありますが、走り始めたのはなぜですか。

最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 何も考えることができない状況で、はじめて走ることに大切な意味を見出せるようになったから。

イ どうにもならないことをどうにかするためには、自分ができることをしなくてはいけないと思ったから。

ウ 最低限のやるべきことも出来ていない状況で、何か行動しなくてはいけないと思うようになったから。

エ 今の気持ちをまぎらわすためには、走ることにしかないと無意識に体が動いていたから。

問七 ⑤ 前平さんはここにきた理由もなにもいわず、ただつき

あえとひと言いつてオレの腕を引いた とありますが、

「前平さん」が「吉瀬」を訪ねてきた理由を全体の内容を踏まえて、六十字以内で答えなさい。

問八 B に当てはまる表現として、最も適当なものを次

から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 願ってもない話だった

イ また走ることができかもしれない

ウ 自分には縁のないことだと思っていた

エ 寝耳に水の話だった

問九 C にはどのような言葉が当てはまりますか。自分

で考えて、答えなさい。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(作問の都合上、表記を変えた部分があります。)

広達、仏の道を求めて ねむごろに 修行して年を経る間、大和国、吉野の郡の(中略) 桃花の郷に一つの橋あり。その橋のもとに、梨の木を伐りて曳き置きて年ごろを経たり。その所に河あり。秋河といふ。その河にかの曳き置きたる梨の木を渡して、人ならびに牛馬これをふみて渡り往反す。

しかる間、広達、要事ありて郷に出づるに、かの梨の木の橋を渡り行くに、橋の下に音ありて いはく、「ああ、いたくふむかな」と。広達この音を聞き、怪しむで下を見るに人なし。ややくしく その所に徘徊して過ぎ去らずして、この音につき立ちて見れば、この橋の木の、仏の像に 造らむとして 未だ造りはてざる木を棄てたるを、橋に曳き渡せるなりけり。広達これを見て 大きに怖れて、これをふみ 奉りけむことを悔いかなしむで、自ら浄き所に曳き置きて、木に向ひて泣く泣く 礼拝恭敬して、誓ひを立てていはく、「われ縁あるが故に、今日この橋を渡りて、このことを知れり。願はくは、必ず仏の像に造り奉るべし」といひて、即ち有縁の所にこの木を運びよせて、人を勧め物を集めて、阿弥陀仏、弥勒、観音の三体の像を作り奉りつ。

『今昔物語集 本朝仏法部上巻』角川ソフィア文庫より

\*往反す：往復する

\*礼拝恭敬して：拝み尊重して

\*有縁：ゆかりのある場所

問一 ねむごろに もと いたくふむかな の意味として、最も適当なものをそれぞれ後から一つ選び、記号で答えなさい。

A ねむごろに

ア 熱心に イ 長い年月

ウ 幼少から エ 寝る時間をおしんで

B もと

ア 材料 イ 手前

ウ 奥 エ 下

C いたくふむかな

ア 痛いように踏むことよ

イ ひどく踏むなあ

ウ 強く踏まないでくれ

エ つらいので踏むなよ

問二 次の語句を現代仮名遣いに直してすべてひらがなで答えなさい。

I いはく                    II 造らむ

問三 次の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

III 未だ                    IV 奉り

問四 その所に徘徊して過ぎ去らずして <sup>①</sup>のようにした理由として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 橋の下から悪口を言われたので、声の主をこらしめようとしたから。

イ 橋の下から呼んだのに、声の主がとおりすぎてしまったから。

ウ 橋の下から声がしたのに、声の主の姿が見あたらなかったから。

エ 橋の下から自分を怒ったのに、声の主が逃げてしまったから。

問五 大きに怖れて <sup>②</sup>となった理由を、五十字以内で説明しなさい。

